

## MAKEUP COSMETICS

**Publication number:** JP54151139 (A)

**Publication date:** 1979-11-28

**Inventor(s):** MURUI YUKIO; SAITOU MASAOKI; AKIYAMA  
YASUKO; KOSHIBA SUZUKO; NARA  
MICHIKO; MORIKAWA YOSHIHIRO

**Applicant(s):** SHISEIDO CO LTD

**Classification:**


**- international:** *A61K8/00; A61K8/06; A61K8/81; A61Q1/00;  
A61Q1/02; A61Q1/04; A61Q1/10; A61Q1/12;  
A61Q5/10; A61K8/00; A61K8/04; A61K8/72;  
A61Q1/00; A61Q1/02; A61Q1/12; A61Q5/10;  
(IPC1-7): A61K7/02*

**- European:** A61Q1/00; A61K8/06; A61K8/81K4

**Application number:** JP19780058028 19780516

**Priority number(s):** JP19780058028 19780516

**Also published as:**

 JP61026764 (B)

### Abstract of JP 54151139 (A)

**PURPOSE:**An emulsion of novel copolymer is incorporated to impart the adequate hardness and flexibility and improve the water resistance and adhesion to skins.

**CONSTITUTION:**An emulsion of a copolymer from at least one of acrylate ester monomers whose ester part has 4-18, preferably 4-8 carbon atoms, such as butyl acrylate, 2-ethylhexyl acrylate, and at least one of methacrylate ester monomers, such as ethyl or butyl methacrylate, is incorporated by 20-50% or 10-25% based on the effective resin components. The product can form continuous coating films, thus being suitable as make-up cosmetics.

---

Data supplied from the **esp@cenet** database — Worldwide

⑩日本国特許庁(JP)

⑪特許出願公開

⑫公開特許公報(A)

昭54—151139

⑬Int. Cl.<sup>2</sup>  
A 61 K 7/02

識別記号 ⑭日本分類  
31 B 0

庁内整理番号 ⑮公開 昭和54年(1979)11月28日  
7432—4C

発明の数 1  
審査請求 有

(全 8 頁)

⑯メイクアップ化粧料

⑰特 願 昭53—58028  
⑱出 願 昭53(1978)5月16日  
⑲発 明 者 無類井行男  
横浜市緑区竹山4丁目2番地  
竹山団地4204—422  
同 斎藤雅昭  
横浜市港南区日野町4288番 港  
南台めじろ団地47—102  
同 秋山靖子  
東京都目黒区駒場1丁目1番7

号  
⑲発 明 者 小柴清子  
東京都練馬区石神井台6丁目17  
番4号  
同 奈良道子  
町田市つくし野3丁目11番3号  
同 森川良広  
横浜市戸塚区矢部町1666番55号  
⑲出 願 人 株式会社資生堂  
東京都中央区銀座七丁目5番5  
号  
⑲代 理 人 弁理士 田所昭男

明 細 書

1. 発明の名称

メイクアップ化粧料

2. 特許請求の範囲

- (1) エステル部の炭素数が4～18のアクリル酸エステルモノマーの1種または2種以上と、メタクリル酸エステルモノマーの1種または2種以上とから得られる共重合ポリマーエマルジョンを配合したことを特徴とするメイクアップ化粧料。
- (2) メタクリル酸エステルモノマーがメチルメタクリレートである特許請求の範囲第1項記載のメイクアップ化粧料。
- (3) メタクリル酸エステルモノマーが、エチルメタクリレートである特許請求の範囲第1項記載のメイクアップ化粧料。
- (4) メタクリル酸エステルモノマーがブチルメタクリレートである特許請求の範囲第1項記載のメイクアップ化粧料。
- (5) アクリル酸エステルモノマーが、ブチルアク

リレートとエチルヘキシルアクリレートとの2種を含む特許請求の範囲第1項乃至第4項のいずれかに記載のメイクアップ化粧料。

(6) 共重合ポリマーエマルジョンの配合料が20～40重量%である特許請求の範囲第1項乃至第4項のいずれかに記載のメイクアップ化粧料。

(7) 有効成分が10～20重量%である特許請求の範囲第1項乃至第4項のいずれかに記載のメイクアップ化粧料。

2. 発明の詳細な説明

本発明は、新鋭なポリマーエマルジョンを配合したメイクアップ化粧料に関するものであり、特にメイクアップ化粧料として好適なものである。

一般にメイクアップ化粧料、就中、メイクアップ化粧料はその形態によって、水系、油系、粉系に分類されるが、製品を評価する基準としては、使用し易いこと、使用感が良いこと、製品の安定性が良いこと、皮膚に対して安全であること等に加えて、特に化粧もちの良いたことが挙げられ

る。

従来のメイクアップ化粧料は化粧もちが良く、汗・皮膚などの人体分泌物の作用により、また風呂・プールの水・海水などの水分の作用により、また、併用する他の化粧料との相互作用により、さらにまた、手や顔による摩擦などの物理的作用によっても化粧くずれを起こすものが多く、油性タイプや油系エマルジョンタイプでこの点を改善したものはみられるが、(特公昭52-27695、特開昭52-20437)、水系皮膚タイプをいし、その他の水系タイプで満足なものはみられなかった。例えば、水系のものは親水性物質を多量に含有するため、汗・涙・雨等に強く耐水性が不良である。又、油系の場合は逆に皮膚や併用する化粧料の油分等の影響を受けて化粧くずれを起こす、即ち耐油性が不良である。又、乳化系においても耐水性および耐油性がいずれも充分ではない。

この化粧くずれは単に水や油との相互作用によるばかりではなく使用部位の皮膚の動き、手或いは顔による摩擦による化粧くずれも大きな因子で

あり、即ち皮膚の接着性が重要なポイントである。

これまでこれらの条件を満足する製品を開発すべく種々の検討が化粧品研究者によって進められてきたがすべての条件を満足したものは水系では、

現在まで皆無である。

これらの製品形態のうち、ポリマーエマルジョンを用いた皮膚タイプのメイクアップ化粧料は使いやすさや化粧効果等にすぐれた性質をもつため広く使用される製品のひとつである。

従来のこの種の化粧料成分には皮膚形成剤として天然のラクトン又は水溶性高分子や乳化剤を用いた乳化重合によるポリマーエマルジョンが用いられてきたが、これらの高分子物質自体の耐水性が悪いため化粧料として充分な耐水性を得ることが困難であった。

この点を解決するために、例えば、特開昭50-125043号公報に見られる、固型、半固型、液状系化粧料の如く、乳化皮膚タイプの化粧料がなされていくが、ポリマーエマルジョン油分へ水へポリマーエマルジョン自体の耐水性が配慮されていないために、必ずしも完全なものとはいえない。

本発明者等は、耐水性の優れた新規なポリマーエマルジョンを用いることにより、前記の如き欠点のない、優れたメイクアップ化粧料を完成するに至ったものである。

耐水性の優れたポリマーエマルジョンの開発検討は塗料業界でもすでに検討がなされ種々のエマルジョンが開発されているが、化粧料用としては特に次の3点を兼ねそなえていなくてはならないため使用できるものは使用できず、化粧品独自の開発が必要不可欠である。

1. 人体に対して有害な成分が存在しないこと。  
(ホルマリン、未反応モノマー等)
2. 微生物に対して安定であること。
3. すぐれた皮膚特性を有すること。
  - ① 連続的な皮膚を形成すること。
  - ② 皮膚が適度の硬さと柔軟性をもつこと。
  - ③ 皮膚への密着性が良いこと。
  - ④ 皮膚が耐水性にすぐれていること。

ポリマーエマルジョンを化粧品に用いた公知技術には、例えば、英国特許第1110240号、米国特許

第3632572号と日本特許特開昭48-36347号がある。

英国特許第1110240号はアクリル酸エステル、メタクリル酸ブチル、メタクリル酸などの中性、無毒アクリル酸エステルを(30〜40%)含む皮膚化粧料とくに耐摩擦性、耐汚れ性、耐水性液状メイクアップであり、米国特許第3632572号は、上の英国特許と同一出願人によるものであるが、アクリル酸ブチル、アクリル酸エステル、メタクリル酸ブチルおよびメタクリル酸が20:15:60:5から成るポリマーエマルジョンを30〜40%含む耐摩擦性、耐汚れ性、耐水性アイライナーである。

また、日本特許特開昭48-36347号は、合成樹脂エマルジョン、特に塩化ビニリデンと塩化ビニルの共重合エマルジョンを90%あるいはメタクリル酸メチルポリマーエマルジョンを80%を主体とする液状層の製法であるが、これらはいずれも耐水性、安全性の点で満足されるものではない。

なぜならば、これら公知技術で使用されているポリマーエマルジョンは、たとえば米国、英国特許

ではポリマー組成中に耐水性の悪いエチルアクリレート及びメタクリル酸がかなり多量に含有されているため、これらポリマーエマルジョンより得られる皮膜は極めて耐水性に乏しく又、化粧品中への使用量が少いことから化粧品も効果、特に耐水性への効果は全く期待できない。又、日本特許特開昭48-36347号の合成樹脂エマルジョンでは樹脂組成自体が人体に対する安全性の面で問題が多く化粧品用原料としては好ましくない。本発明は乳化剤を用いた特殊なポリマーエマルジョンを使用することによって上記の如き欠点のない優れたメイクアップ化粧料を提供するものである。

(以下全角)

の炭素数が9以上になると得られたポリマーエマルジョンに臭いが有るため、化粧品への配合条件に多少の制限が加えられる。

従って、エステル部の炭素数は4〜8が好ましい。中でも2-エチルヘキシルアクリレートが最も好ましい。

上記のアクリル酸エステルモノマーと併用するモノマーとしては、単独重合した際のMFT(最低被膜形成温度)が0℃以上であるメチルメタクリレート(MMA)、エチルメタクリレート(EMA)、ブチルメタクリレート(BMA)等のメタクリル酸エステルが使用される。ビニルアセテート、スチレン、アクリロニトリル、塩化ビニル等は、皮膚安全性、耐水性、臭い等に欠点があり、使用すべきではない。

アクリル酸エステルモノマーに混合されるメタクリル酸エステルモノマーの量は、アクリル酸エステルモノマーの種類、製造される化粧料の製品形態あるいは、化粧料に配合される他の成分、例えば粉末量や油分によって変化し、一般に限定す

特開昭54-151139(3)

本発明のメイクアップ化粧料は、エステル部の炭素数が4〜18のアクリル酸エステルモノマーの1種または2種以上と、メタクリル酸エステルモノマーの1種または2種以上とから得られる共重合ポリマーエマルジョンを、好ましくは20〜50重量%、有効成分として10〜25重量%配合することによって得られる。

アクリル酸エステルモノマーとしては、ブチルアクリレート(BA)、イソブチルアクリレート(IsoBA)、ヘキシルアクリレート(HA)、2-エチルヘキシルアクリレート(2EHA)等が含まれるが、特に2-エチルヘキシルアクリレートを単独で、または他のアクリル酸エステルモノマーと併用することが最も好ましい。

エステル部の炭素数が9以下であるメチルアクリレートやエチルアクリレートを使用した場合には、耐水性が極めて悪く、良好なメイクアップ化粧料は作り得ない。また、エステル部の炭素数が18以上のアクリル酸エステルは反応性が悪く、エマルジョン重合には適さない。また、エステル部

ることはできないが、例えば、MMAの場合は、アクリル酸エステルモノマー/MMA=5/5〜5/2好ましくは5/4〜7/3であり、EMAの場合は、アクリル酸エステルモノマー/EMA=3/7〜7/3好ましくは4/5〜6/4である。

一般的に言うならば、アクリル酸エステルモノマー/メタクリル酸エステルモノマー=3/7〜5/2であり、これをポリマーのもつM.F.Tでみるならば30℃〜80℃、好ましくは10℃〜10℃である。

エマルジョンの合成は、一般的な公知の乳化重合法によって行なうことができる。即ち、重合反応装置に乳化剤の水溶液を仕込み、その後50〜80℃に加熱した条件下で、モノマー及び重合開始剤(例えば過酸化水素又は過硫酸アンモニウム等)を数時間刻にわたって滴下しながら混合させ、しばらく熟成を行なった後、滴下して未反応モノマーを除去する。

一般的には、乳化剤としてアニオン及び非イオンの乳化剤を0.5〜5%、又、重合開始剤は0.05

〜1.0%程度使用し、重合反応を完全に行なう。  
場合によっては少量のカルボキシル含有モノマー  
(例えば、アクリル酸、メタクリル酸等)の共存  
が好ましいことは従来技術から言うまでもない。

次に、本発明に用いたポリマーエマルジョンの  
製造例を示す。

(合成例1)

500 mlの四つ口フラスコ中に水150 mlを入れ、  
30 gのポリオキシエチレンラウリルエーテルと  
0.5 gのラウリルサルフェートを溶解させる。ブ  
チルアクリレート105 ml、メチルメタクリレ  
ート40 ml、アクリル酸2 mlを混合したモノマーと  
10%の過硫酸アンモニウム水溶液10 mlとを各々  
数10回に分けて、70〜80℃に加熱したフラス  
コの中に滴下し、空室気流中、かきまぜ速度  
200 rpm (ねじり部かくはん棒)で3時間、重  
合反応を行なった。  
その後、更に1時間加熱撹拌を行ない500mmHg  
で減圧脱気を行ない未反応モノマーを除去する。  
冷却後、セロファン透析膜に移し透析を行ない

イオン性不純物を除去して、親水性良好なポリ  
マーエマルジョンを得た。

(合成例2)

500 ml四つ口セパラブルフラスコ中に、水150  
mlを入れ、4.5 gのポリオキシエチレンラウリ  
ルエーテルと、0.5 gのラウリルサルフェートを  
溶解させる。ブチルアクリレート40 ml、2-エ  
チルヘキシルアクリレート40 ml、メチルメタク  
リレート60 ml及びアクリル酸2 mlを混合したモ  
ノマーと、10%の過硫酸アンモニウム水溶液10  
mlとを各々数回又は数10回に分けて、70〜75  
℃に加熱したフラスコの水溶液の中に滴下し、  
空室気流中、かきまぜ速度250 rpm (ねじり部  
撹拌棒)で3時間重合反応を行なう。

その後1時間加熱撹拌を行ない、500mmHgで減  
圧脱気を行なう。

冷却後、セロファン透析膜を用いて透析を行な  
い、イオン性の不純物を除去すると親水性の良  
好なポリマーエマルジョンが得られる。

次に、ポリマー組成の範囲を明確にするため、  
表-1に各種モノマー比におけるポリマーエマル  
ジョンの物性値を記した。

(以下全表)

表-1 各種モノマー比におけるポリマーエマルジョンの物性値

モノマー比	M.W.T (℃)	ポリマーエマルジョンの物性値		皮膜の物性値		乾燥性
		粘度	安定性	耐水性	耐油性	
EA/BA/BMA						
20/20/60	-3.8	○	○	×	×	△
EA/MMA						
80/20	3.4	○	○	×	×	△
60/40	2.88	○	○	×	×	△
EA/EMA						
80/20	-4.6	○	○	×	×	△
50/50	21.5	○	○	×	×	△
40/60	-5.2	○	○	×	×	△
EA/EHA						
70/30	-7.7	○	○	△	○	○
EA/MMA						
40/60	8.4	○	○	△	○	○
EA/EMA						
60/40	-7.2	○	○	△	○	○
40/60	1.66	○	○	△	○	○
EA/EMA						
70/30	-3.22	○	○	△	○	○
20/80	1.54	○	○	△	○	○
EHA/MMA						
70/30	-3.8	○	○	○	○	○
60/40	1.20	○	○	○	○	○
EHA/EMA						
60/40	-4.0	○	○	○	○	○
EHA/BMA						
40/60	-8.0	○	○	○	○	○
EA/EHA/MMA						
40/40/20	-21.4	○	○	○	○	○
40/30/30	-5.8	○	○	○	○	○
30/30/40	1.08	○	○	○	○	○
30/30/30	2.97	○	○	○	○	○
EA/EHA/EMA						
40/30/30	-17.6	○	○	○	○	○
30/30/40	-5.8	○	○	○	○	○
30/30/30	3.7	○	○	○	○	○
EA/EHA/BMA						
30/30/30	-18.8	○	○	○	○	○
20/30/50	-9.2	○	○	○	○	○
EA/EHA/MMA/BMA						
20/30/30/20	-7.7	○	○	○	○	○

表-1の評価基準は次の通りである。

- ◎ 極めて良好  
○ 良 好  
△ 普 通  
× 不 良

又、表-1の皮膜特性の評価試験法は次の通りである。

① 透明性：皮膜上及び透明ガラス板に $5 \times 15 \text{ cm}$ の布で試料を被布し乾燥後の透明性を評価する。

② 粘着性：温度 $20^\circ\text{C}$ 、湿度 $50\%$ の条件下で皮膜上及び $0.5 \times 0.5 \times 10 \text{ mm}$ サイズのナイロン板上に試料を被布し30分後の皮膜の粘着性をミクロスパチ、フスにて試験判定する。

③ 白化度： $0.5 \times 0.5 \times 10 \text{ mm}$ サイズのナイロン板上に試料を被布し、時間乾燥後蒸留水中に浸漬し、1日後、3日後、7日後の皮膜の白化度および腐蝕度合いを肉眼にて判定する。

④ 耐水接着性：③の白化度のサンプルについて

同様にナイロン板上でのサンプルの接着度合い及び白化度合いを評価する。

⑤ 乾燥接着性：温度 $20^\circ\text{C}$ 、湿度 $50\%$ の条件下で皮膜上及び $0.5 \times 0.5 \times 10 \text{ mm}$ サイズのナイロン板上にサンプルを被布し30分後の接着性をミクロスパチ、フスにて皮膜を表面よりはがし評価する。

(以下同左)

このポリマーエマルジョンをアイソシアップ化材料中、その用途に応じて $10 \sim 90\%$ （ $50\%$ 濃度濃度のエマルジョンとして）好ましくは $20 \sim 80\%$ を使用することにより優れた製品特性をもった製品を得ることができる。

即ち、ポリマーエマルジョンのもつ上記の特性を製品特性に反映させることが可能となり、各種条件を満たすアイソシアップ化材料が得られるわけである。

製品中のポリマーエマルジョンの添加量が $10\%$ 未満ではポリマー自体の溶解性や処方中の他の薬水性添加物のためポリマーエマルジョンのもつ機能が発揮できない。

表-2にポリマーエマルジョンの添加量をかえた場合の製品特性を示したが添加量 $10\%$ 以上好ましくは $20 \sim 80\%$ までよい効果が見られることが判る。以上の如く界面活性剤、保護コロイド剤等の乳化剤を用いた乳化重合法により得られる前記のポリマーエマルジョンを添加することにより各種条件を満たすアイソシアップ化材料が得られたこと

とは文献未公知であり画期的なことである。

表-2 ポリマーエマルジョンの添加量と製品特性

		A	B	C	D	E	F	G
基	ポリマーエマルジョン (DA/EMA/MA)	50	10	15	20	40	50	60
	グリセリン	50	×	×	×	×	×	×
	イオン交換水	71.5	66.5	61.5	57.5	52.5	47.5	42.5
	ポリメチルメタクリレート	1.0	×	×	×	×	×	×
	エチルセシメチルセシメ	1.0	1.0	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
方	ベントナイト	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
	オリーブオイル	50	×	×	×	×	×	×
	薬 料 (混合レーキ)	1.0	×	×	×	×	×	×
	ポリビニルアルコール(部分ケン化)	1.0	×	×	×	×	×	×
	水	1.0	×	×	×	×	×	×
製	皮膜形成能	×	△	△	○	○	○	○
	膜への接着性(溶着性)	×	×	△	○	○	○	○
	耐 水 性	×	×	△	○	○	○	○
	耐 油 性	×	○	○	○	○	○	○
	化粧のおとしやすさ	○	○	○	○	○	○	×

(※効果が出すぎて悪い)

評価基準 ×：効果がみられない

△：効果が多少みられる

○：良 好

次に本発明による化粧料の使用効果について述べる。

本発明は化粧料特にアイライナー化粧料の経時における化粧もちの向上を目的としたものであるから、実際の化粧もちの効果を評価する必要がある。このため、以下に示すような実使用テスト及び物理測定により使用効果を調べた。

(テスト品) 後に記載の実施例1に相当するビームタイプアイライナー製品及び市販の類似製品

(テスト法)

① パネル30名による実使用テスト

② 物理測定による評価

③ 10×40mmの大きさのナイロン板にサンプルを塗布し、時間経過で乾燥後

(1) 50℃サンプル管にジュラコンビーズを10g入れ上記のサンプルを入れてシェイカーで5時間振盪し乾燥の率耗度合を評価する(摩擦接着性)。

表-3は市販品アイライナー及び本発明で得られたポリマーエマルジョンを使用した皮膚タイプアイライナーの製品特性を比較したものであり明らかな効果が見られている。

(以下 全 白)

特開昭54-151139号

(1) 50℃サンプル管にジュラコンビーズ

10g及びイオン交換水50ccを入れサンプル片を挿入して(1)と同じ様にシェイカーで5時間振盪し乾燥の率耗度合を評価する(摩擦接着性)。

表-3

試験項目	試料	本発明のアイライナー ポリマー組成 MAA/BA/2DHA 40/20/30	市販品A ポリマー組成 MAA/BA/MAA 40/30/30	市販品B ポリマー組成 MAA/MAA 90/10	市販品C ポリマー組成 MAA/BA 70/30
実使用テスト	塗膜の亀裂	○	△	×	×
	塗膜の部分剥がれ	○	△	×	△
	汗に対する強さ	○	×	×	×
	皮膚に対する強さ	○	○	○	○
物理測定	摩擦接着性	○	○	△	△
	耐水摩擦接着性	○	×	×	×

表-3の評価基準は次の通りである。

- 良 好
- △ 普 通
- ×
- × 極めて不良

次に本発明による実施例を示す。

実施例-1 液状皮膚タイプアイライナー

(処方)	カーボンブラック	3.0 (重量部)
	黒色酸化鉄	3.0
	二酸化チタン	1.0
	ボツリン酸ソーダ	0.05
	イオン交換水	35.0
	ポリオキシエチレンソルビタンモノオレート	0.5
	グリセリン	3.0
	Naカルギンメチルエーテル	1.0
	ベントナイト	0.5
	ポリマーエマルジョン	50.0
	MAA/BA/2DHA=20/40/30 (樹脂含量50%)	
	防腐剤	適 量
	香料	適 量

(製法) イオン交換水にボツリン酸ソーダ及びポリオキシエチレンソルビタンモノオレートを溶解し、これにカーボンブラック黒色酸化鉄及び二酸化チタンを分散混合し、コロイドミルを用いて均一に懸濁、分散させる。これにグリセリン及び増粘剤を添加し、攪拌混

合しながら順次ポリマーエマルジョン、防腐剤、香料を添加し、均一になるまで混合すると、黒色のビールオフタイプのアイライナーが得られる。

## 実施例一ス クリーム状マスカラ

(処方)	ビーズワックス	30 (質量部)
	微細パラフィンワックス	30
	ステアリン酸	25
	軽質流動パラフィン	50
	イオン交換水	265
	トリエタノールアミン	10
	ポリビニルアルコール	10
	ベントナイト	20
	タルク	50
	黒色酸化鉄	130
	ポリマーエマルジョン	250
	(KMA/EA-40/60)	
	(樹脂含量50%)	
	プロピレングリコール	20
	香料	適量
	防腐剤	適量

(製法) イオン交換水にプロピレングリコール、

トリエタノールアミン及びベントナイト及びポリビニルアルコールを分散させる。そしてタルク及び顔料を添加し均一に分散させた後、70℃に加熱する。これに加熱溶解した油相成分を徐々に攪拌しながら添加し、均一に乳化する。乳化後ポリマーエマルジョンを加えて均一に混合し、次に防腐剤及び香料を添加して40℃まで冷却すると、黒色のクリーム状マスカラが出来る。

## 実施例一ス ファンデーション

(処方)	軽質流動パラフィン	100 (質量部)
	ラノリン誘導体	20
	微細パラフィンワックス	20
	ステアリン酸	20
	セチルアルコール	65
	ソルビタンセスキオレート	10
	プロピレングリコール	20
	ポリエチレングリコール	30
	イオン交換水	255
	トリエタノールアミン	10
	ベントナイト	20

ポリマーエマルジョン	300
(KMA/EA-40/60)	
(樹脂含量50%)	
タルク	100
黒色酸化鉄	30
黄色酸化鉄	20
赤色酸化鉄	65
防腐剤	適量
香料	適量

(製法) イオン交換水にプロピレングリコール、

ポリエチレングリコールに溶したベントナイト、系増粘剤を分散させ、トリエタノールアミンを入れて均一に分散させる。その後70℃まで加熱してタルク及び顔料を添加し均一に分散させる。次に溶解した油相成分をすでに調整した水相部に攪拌しながら、徐々に添加し均一に乳化する。冷却後ポリマーエマルジョンを均一に混合し、その後防腐剤、香料を加えて黒色のクリーム状ファンデーションとする。

本発明は実施例にもとづくアイメイクアップ化

粧ファンデーション以外に口紅、パッチ、ボディペイント、バリシアクリーム、リググメイ、クアッパ化粧料や毛髪用着色料等の皮膚化粧料や面化粧料に広く応用が可能である。

特許出願人 株式会社 資 生 堂

代理人 田 所 昭 男



手 続 補 正 書 (方式)

昭和53年7月29日

特許庁長官 熊谷 徳 二 殿

5. 補正命令の日付

昭和53年7月1日(昭和53年7月25日発送)

6. 補正の対象

明細書の発明の名称の欄

7. 補正の内容

発明の名称を「マイタフアップ化粧料」と補正する。

1. 事件の表示

昭和53年特許第52022号

2. 発明の名称

マイタフアップ化粧料

3. 補正をする者

事件との関係 特許出願人

住 所 東京都中央区銀座7丁目6番5号

名 称 (195) 株式会社 資 生

代表者 山 本

4. 代 理 人

郵便番号 104

住 所 東京都中央区銀座7丁目6番5号

株式会社 資 生 会 内

氏 名 (7202) 弁護士 田 所 昭 男

(電話番号 東京(03)41111)

